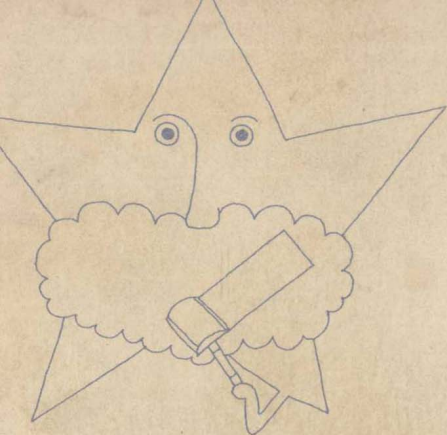
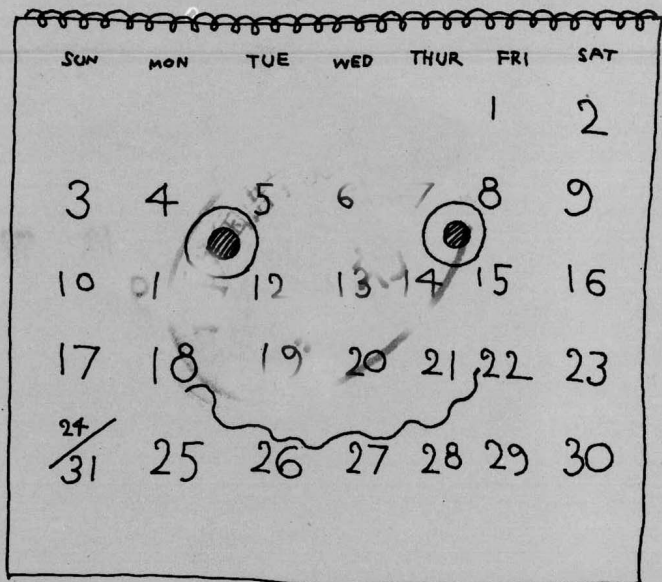




お世話

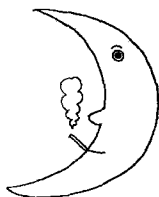
——日づけのある随筆

丸谷オ一



朝日新聞社

大きなお世話



≫日づけのある随筆≪

定 価

650円

*

発 行

昭和46年11月30日第1刷

*

著 者

丸谷才一

*

発行者

朝日新聞社 角田秀雄

*

印 刷

共同印刷株式会社

*

発行所

朝 日 新 聞 社

東京・大阪・名古屋・北九州

© Saiichi Maruya 1971

0095-253946-0042

目次

Ⅴ男と女の世の中Ⅵ

ビリビリ人類史 13

女の肋骨 16

美女 19

マーガレットのミニの唄 22

金欄緞子の帯しめながら 25

おしやれ競争 28

服装転向 31

いちじくの葉の落ちるとき 34

米国娘氣質 37

遠くて遠い話 40

只ほど高いものはない 43

火の車 46

死んでもラッパ 49

男の顔 52

会議に遅れる 55

独裁者と女 58

▽犯罪学の勉強△

ニセモノ譚 67

人手不足 70

そっくりシヨ― 73

犯罪美学 76

お裾分け 79

ほのぼのと霞が関の春の夢 82

脱税奥ゆるし 85

沖縄からの死神 88

人買い神父 91

おとなしい日本人 94

千百万のK 97

黒い白球 100

コンピュター野郎 103

白晝堂々 106

▽乱世風俗考△

灰とビニール——焼跡の世界 111

あたるも八卦 120

山珍海味 123

切られ与三とペルリと鯨 126

近代園業考 129

法と倫理と風俗と 132

のんできますか？ 135

一九七〇年夏 138

狐は穴あり空の鳥は罅あり、されど：	177
雀のお宿	174
仙台の七夕に寄せて	171
鳴った汽笛が忘らりよか	168
タクシー一家言	165
騒音屑屋	162
芸術雑考	159
十数年の怠慢	156
ベストセラー'69	153
週刊未開	150
お大事に	147
犬の床屋	144
鹿と蜂	141

	ミイラの研究	185
	ヒマラヤの雪深ければ	188
	怪女モリー	191
	一世多元のすすめ	194
	ハンコとサイン	197
	合言葉はモーレッツ	200
	春眠	203
	「初日の出エック」考	206
	商売往来	209
	ゴキトラーズ	212
	虫のいろいろ	215
	SFもどき	218
	のり巻のり弁のり茶漬	221
	鯰と鱧と蟹	224
	ヤボテン様の細道じゃ	227

Ⅴ昔は床屋でしゃべったことⅥ

揺れる世の中

233

モラトリアム！

236

レーニンにはひげがある

239

クレオパトラの鼻

242

閑談閑議

245

もつとテレビを

248

無理に暮れ済ます

251

さて万国の博覧会

254

郵便配達はベルを鳴らさない

257

八人の侍

260

異説黄門記

263

選挙あれこれ

266

黒いマンジュウの下で

269

ああ牛込柳町 272

「自由」を彼らに 275

幻の宝へ 278

▽荒っぽい話△

サッカーは血を荒す 283

アルカトラス島の反乱 286

離れて遠きベトナムの 289

カボチャの国の地図を見ながら 292

ある間投詞のことから 295

狼にチップ 298

板前は包丁で 301

▽あれこれ教育論△

ママには好物が二つある 307

八百屋の長兵衛 310

ウソツキ学校 313

知名度のためなら 316

虫ケラとして 319

欠陥史学 322

オハライ願書 325

レジスタンス的出題 328

理想と現実 331

小指をからめて 334

祝卒業 337

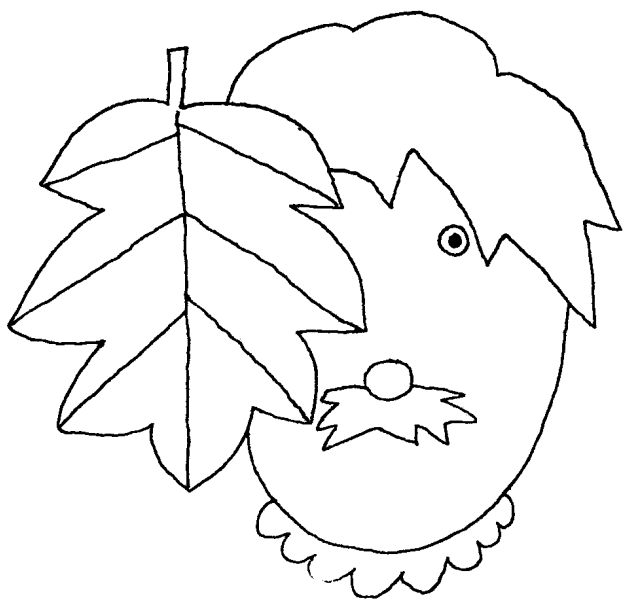
あとがき 340

装幀
さしえ
和田 誠

大きなお世話

——日づけのある随筆

男と女の世の中



ビリビリ人類史 V70・3・27 A

子供の時分から電気というものがこわくて仕方がなかった。もちろん、まさか行燈やランプで勉強したわけではないが、たとえばヒューズが飛んだときの修繕など一度もしたことがない。何かこう、ビリビリッと来そうで、危険きわまりない感じなのである。ぼくがいまだに安全カミソリに固執し、便利調法な電気カミソリを採用しないのも、この原始的な恐怖心と関係があるかもしれない。そして、まず頬や顎や鼻の下を湯で濡らし、それからシェイヴィング・クリームをなすりつけ、それを金属の刃でこすり取り、悪くすると血がにじみ出て、そうなれば当然ちよつと痛く、しかもその刃はせいぜい二へんくらいで捨てなければならぬという、はなはだ厄介で不経済な仕掛けなのに、それでも安全カミソリが全世界的にこれだけ余命を保っているところを見ると、人類の雄おすのなかにはぼくと同じように電気をこわがる者がかなり多いのだろうと思う。

これはおそらく、われわれの祖先である猿人とか原人とかが、山野において、狩だの、果物の採集だのをしていたころ、雷に打たれて戦慄した恐怖の名残りである。狩や果物集めは、雄がこれをおこなった。雌は子供を抱いて洞穴のなかで、「ゴロゴロ、こわいねえ」なんて呑気なことを言っていればよかった。

だから、というのは話がすこし飛躍するが、女はわれわれ男がついうっかり顎のところなんかをチョイと切って、ティツシュ・ペーパーの切れっぱしをその小さな傷の上に貼り、血止めの手当てをしているのを見ると、「ねえ、電気カミソリを買ったらどう？」などと軽々しく口を出すのである。悠久なる人類の歴史がちっとも判っていない。

そう言えば家庭の電化がこれだけ成功したのは、この人類史の大問題と関係があるね。人類の雌には、太古の昔の、雷や稲妻による悲惨な怯えの記憶がきれいさっぱり欠落しているから、と言うよりもむしろ、もともとそれがないから、電気掃除機や電気洗濯機を見ても、ひよっとすると感電死するのじゃないかなどと不安になることがなく、従っていたって安易な態度で買いかめるのである。

そして雄のほうはと言うと——近ごろの豪華なオフィスでは化粧の絨緞じゅうたんを敷きつめているため、靴の底がそれにこすれて起る静電気のせいで、電気ショックを感じるといふ。握手をするとか、パツと来たり、ドアを開けるとビリビリと感じたり、暗闇で指さきから火花が出たりで、つ